算盤の先生

算盤の練習を十分しておくように、と一通の連絡が人事部から来たのは秋風が気持ちの良い九月下旬であった。銀行に就職が内定し、さてこれからどうしようかと思っている矢先のことだった。

下宿のおじさんに、近所に算盤塾はないかと尋ねると、うまい具合に歩いて五分もかからない所にあると言う。ものは試しと早速、冷やかしに出かけた。

下駄をガラガラいわせながら尋ねたクダンのそろばん塾は、農家の蚕小屋を改造した代物で、玄関にある障子は所々穴があいている。中からは子供の声が賑やかに聞こえてきた。人の気配を感じたのか若い女性が出てきて、何か用かと聞くので「先生はおりませんか。」と返すと、「私ですが。」と女性は答えた。私は一瞬たじろいだが、ここに決めたと思うのも同時であった。

その夜、下宿の麻雀は賑やかだった。算盤の先生は若くて、その上美人でと話に尾

ひれがつきすぎて、それはもう絶好調の私であった。卓を囲む友人が卒業記念に頂くものは頂けば、とか何とか喧しい。つい煽てられて麻雀には根性が入らずボロ負けだったが、何か良いことが起こりつつある予感が私の胸の中に確かに湧き出ていて負けた悔しさを打ち消していた。

翌日からの算盤の授業は正直言って楽しいものではなかった。周りは皆ガキばかり。オジサン呼ばわりされた挙げ句、彼らの方が算盤も上手いとあっては一時間の授業が苦痛以外の何物でもなかった。

しかし私にも得意とする分野がある。早いと言えば早すぎたが、二週間目の週末にはデートに誘ってみた。ライバルは小学生ばかりだから勝負は最初からついていた。それ以来私は週末だけが楽しみの生徒になってしまった事は言うまでもない。卒業まで半年あったが、大学時代の大半がアルバイトと金の競争だった私にとって最高に幸せな時間であった。

先生はその後、縁があって私の妻となったが、群馬県から遠く離れた徳島までついて来た彼女の勇気には、ただただ感謝するほかはない。私にとっては過ぎた女房である。

しかし、一つだけ彼女は嘘をついていた。彼女の指導で三級の実力があった筈の算

盤だったが、銀行に入った年に実施された算盤検定では、見取り、掛け、割り、伝票算の四科目、すべて不合格となったのである。つまり三級の実力はなかったのである。

今にして思えば彼女の塾へ通った六か月間、月謝というものを払った記憶がない。だから責任を問う資格も私にはない。